

論文

大学生における語彙力と英語標準テストの関連性

—ディクテーションテストと語彙力^{注1}—

古 莊 智 子

要 旨

Vocabulary Levels Dictation Test (VLDT) は、語彙知識の測定にヒアリングの要素を取り入れることにより、受容語彙知識を測定すると同時に発表語彙知識の測定を行うことを目的として、Fountain and Nation (2000) により開発された。Fountain and Nation は、VLDT と Vocabulary Levels Test (VLT) および grammar test は有意な相関が見られたと報告している。本研究の目的は、リスニング教育の中で付加的に辞書調べ活動を導入し、リスニングと語彙力の関連性を検証すること、またリスニング力の測定に、VLDTを導入し、英語標準テスト (CELT, TOEIC), VLT および CELT との関連性を示すことである。

被験者は、英語を第二外国語として学ぶ日本人大学生 178 名である。被験者を任意の 2 グループに分け、一方のグループには基本語彙 2,000 語レベルの辞書調べ課題を、他方には 3,000 語レベルの辞書調べ課題を、春学期 10 週、秋学期 10 週、合計 20 週にわたり、リスニング教育の中で付加的に導入した。

分析の結果、VLDT と VLT の関連性に関しては、.39 ～ .57 の範囲で全て有意な相関が示され、とくに 3,000 語レベルは最も高い相関係数が示された。また、VLT-2,000 語の得点 (第 1 回目) を高低群に分けて調査を行った結果、高得点群は、VLDT, CELT の平均得点において有意に高い結果を示した。VLDT 高得点群、低得点群と CELT の間には交互作用は示されなかったが、*t* 検定を行った結果、群間には 1% 水準で有意差が

示された。辞書調べ課題に関しては、全ての分析において有意差は示されず、今後の課題として、調査方法を再検討することにより、リスニング力向上のために有効な語彙力について、さらなる研究を行っていく。

キーワード：語彙力, TOEIC, リスニング, ディクテーションテスト

1. はじめに

Oller (1979) は、ディクテーションを単なるスペリングのテストに過ぎないと批判する意見に対し、信頼性があり妥当性が高いテストである (p.39) とし、ディクテーションとそれ以外の多様な言語使用の間には基本的な類似点があることを示唆する証拠がある、と主張している (p.42)。最近の研究で、Buck (2001) は、ディクテーションテストを世界で最も広く使われている統合的な能力を測るテストであるとし (p.73)、リスニングスキルだけでなく、短期記憶とライティング能力を必要とする、と述べている (p.78)。また Buck はディクテーションテストを構成しているセグメントの長さの重要性を主張し、受験者の能力によってセグメントを調整することにより、様々な方法でディクテーションテストを使うことができる、という見解を示している (pp.77-78)。

Fountain and Nation (2000, p.30) は、伝統的なディクテーションテストの形式を改作し、学習者の幅広い異なった語彙知識に焦点を絞ることによって、特別なテストスキルなしに、誰にでも早く信頼性のある採点が可能な Vocabulary Levels Dictation Test (以下 VLDT) を開発した。Fountain and Nation は、Nation (1990) が語彙の知識を、形式・意味・使用の3つの側面に分類し、それぞれについて受容知識と語彙知識の2つの側面に分け解説していることに言及し、VLDT では語彙知識の測定にヒアリング要素を取り入れることにより、受容語彙知識を測定すると同時に発表語彙知識、すなわち書き出されたスペリングの測定を行うものである、と説明している (p.35)。VLDT は A, B, C, D の4つの並行テストから作成されており、各テストは5つのパラグラフからなる文章で構成されている。導入パラグラフは基本語彙1～500語、第1パラグラフは基本語彙501～1,000語、第2パラグラフは1,001～2,000語、第3パラグラフは2,001～3,000語、第4パラグラフは4,000～6,000語にグレード分けされた語彙をターゲット語としている。各パラグラフのターゲット語および語彙レベルは、Thorndike and Lorge (1944) の語彙リストを用い作成された。Fountain and Nation は、これらの4並行テストの相互相関は .95 以上、語彙レベルテストとの相関は .78、Grammar test との相関は .70 以上であり、高い信頼性

と妥当性を有することを報告している。

VLTは、語彙レベルを出現頻度順に基づいて測定するためのテストであり、語彙レベルとしては、5つの語彙頻度レベル(2,000語・3,000語・Academic語・5,000語・10,000語)がある。各レベルのテストは、6個の単語と3種類の定義文から構成され、それぞれの定義文に対し、6単語の中から内容が一致するものを選択する形式で1 clusterが構成されている。各レベルは10 clusterからなり、30点満点で採点される。

2. 先行研究

浦田(1988)は、対象とする学習者にとって適切なディクテーション教材を選択するにあたり、総合テストとしてのディクテーションの教材の違いが得点に影響する可能性について検討するために、1センテンスに含まれるシラブル数および単語数が異なる4種類の教材とCELTテストを用いて調査を実施した。その結果、教材の種類とCELTテストの得点との間に差はなく、また教材間での相関も高かったことから、ディクテーションの構成要素が得点に及ぼす影響が少なかったことを報告している。

リスニングと語彙力の関連性について、三根・枝澤・吉村・今井・布施・平岩(2006)は、ESL学習者のリスニングと語彙力および学習方略の関係を調査し、語彙テストの成績は、CELT、TOEIC-Listening得点に対して一貫して有意な相関係数を示したことを報告し、このことは「リスニング・スキル向上のために語彙力を増強することが有効であり、そのための指導を導入することの必要性」(p.66)を示すとともに、「リスニング指導において学習者に付加が大きい語彙の提示を避ける必要がある」(p.66)と示唆している。三根らはまた、英語を日本語に置き換えながらのリスニングは語彙増強に結びつかないことを報告し、「リスニングに関わる語彙力は、リーディングによる(paper)テストで測定するのではなく、音声的なリスニング面での語彙力の測定を行う必要がある」(p.8)ことを主張している。

枝澤・今井・古荘・布施・三根(2007, p.61)は、リスニングの授業において語彙の辞書調べ課題を与え、「TOEICで測定されるような語学力の向上のためには、1) 2,000語レベルをできるだけ早くマスターさせること 2) 3,000語レベルの得点の向上を目指した語彙指導の重要性」を指摘した。とくに、「3,000語レベルの語彙をできるだけ多く習得させることが、その後の英語力を育成する上で有効な指導法である」ことを示唆している。

今井、古荘、布施、三根(2009)は、通常リスニング教育の中で、付加的に導入した辞書調べ活動の語彙レベルの違いが語学力の伸びにどのような効果をもたらすかを検証した。その結果、アカデミック語に比べて3,000語レベルの語彙力を育成することが英語力の向上にとって有利であること(p.202)を示した。

3. 目的

本研究は、枝澤他 (2007)、今井他 (2009) の先行研究に続き、リスニング教育の中で付加的に辞書調べ活動を導入し、リスニングと語彙力の関連性を検証すること、またリスニング力の測定には、VLDT を新たに導入し、VLT、英語標準テスト (CELT, TOEIC) との関連性を検証することを目的とし、以下のように Research Question を設定した。

- 1) 辞書調べ課題の語彙力と TOEIC スコアに対する効果を示すこと
- 2) VLDT と VLT および CELT との関連性を示すこと

4. 方法

4.1. 被験者

被験者は、英語専攻でリスニング科目を必修で履修した大学2年生の女子学生178名である。被験者を任意の2グループに分け、一方のグループには基本語彙2,000語レベルの辞書調べ課題(以下、B2群)を、他方には3,000語レベルの辞書調べ課題(以下、B3群)を毎回10語ずつ春学期10週、秋学期10週、合計20週にわたり課した。リスニングの授業は、基本的には昨年度と同様の手順で進められた。具体的には、週1回90分のうち、1)アナライザーを使用したTOEICリスニング形式のタスク(20分)、2)テキストとワークシート教材を使用したCBSニュースの視聴(30分)、3)ワークシート教材を用いた映画の視聴(30分)の学習指導を行った。教室外の課題として、毎回の授業で扱ったTOEFLタスクでは、質問および解答にあたる全ての英文を、またニュースと映画では部分的な発話をディクテーション課題として与え、翌週の授業時に解答をチェックさせた。

4.2. 辞書調べ課題

2,000語レベル(20回分)と3,000語レベル(20回分)の語彙リストは、枝澤ら(2007)で作成したものの20語×10回を10語×20回に分けたものである。本年度は辞書調べ課題に英英辞書を使用することを必須とし、単語の意味を英語で調べ、記入する以外に、発音、強勢の位置、品詞を調べるよう指示した。語彙リストは毎回期日までに提出するよう指示し、翌週の授業で課題を返却した後、教員から発音や強勢のおき方などの指導や意味に関する補足説明が行われた。

4.3. 学習効果の測定

辞書調べ課題の効果を測るために、VLTと英語標準テスト(CELT, TOEIC)をリスニン

大学生における語彙力と英語標準テストの関連性

グ授業指導の事前事後に繰り返し測定した。CELT (Listening Section) は、2007年4月と7月に Form B を、10月と2008年1月に Form A をそれぞれ2回ずつ実施した。TOEIC は2007年1月と2008年1月に TOEIC-IP テストを受験した。

語彙力の測定には、Schmitt (2000) による VLT-Version 1 と Schmitt, Schmitt and Clapham (2001) による VLT-Version 2 を用いた。2007年4月と10月に VLT-Version 2 を、7月と2008年1月に VLT-Version 1 を実施した。本研究では、毎回のテストで2,000語、3,000語、Academic 語、5,000語の4レベルの問題を30分で解答させた。10,000語レベルの問題については、制限時間以内に被験者に解答を求めるのが困難であるため省略した。

VLDT は、2007年4月に Test-A、7月に Test-B、10月に Test-C、2008年1月に Test-D を実施した。各テストは、Fountain and Nation (2000, p.30) の指示通り約12分の録音テープにより1回だけ提示した (Appendix 1 は Test-B の冒頭箇所のコピーである)。解答用紙は自作し、日本語による簡単な指示文の後に、それぞれのフレーズごとに聞き取った音声を書き取るための解答欄を用意し、終了後に見直しのための時間を3分間与えた。採点方法は、Fountain and Nation (2000, pp.32-33) に準じた。

5. 結果

5.1. 辞書調べ課題に関する結果

第1要因として辞書調べグループ B2 群 と B3 群、第2要因として TOEIC の1回目の高群・低群、第3要因として VLDT、VLT-2,000語、3,000語、Academic 語、5,000語レベルまでを投入し、3要因分散分析 (MANOVA) を5通りで分析した (Appendix 2)。その結果、全ての組み合わせにおいて B2 群と B3 群の間における主効果については、もっとも危険率の低いもので19%となり、全てにおいて有意な結果は示されなかった。また、この要因を含む交互作用についても全ての組み合わせで17%以上の危険率を示し、帰無仮説を棄却することはできなかった。従って、辞書調べ課題に関する全ての分析において、語彙力の伸び、TOEIC スコアに有意差は無いと結論づけられた。

5.2. VLDT と VLT の関連性

Table. 2 は VLDT と同じ時期に実施した VLT の各語彙レベルの得点と VLDT の総得点の相関係数を示したものである。相関係数は .39 ~ .57 の範囲で全て有意であり、とくに 3,000語レベルは最も高い相関係数を示した。

Table 1. 記述統計 (VLT, VLDT)

	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
VLDT-A	205	20.91	7.27
VLDT-B	205	29.13	8.75
VLDT-C	191	24.50	8.53
VLDT-D	192	27.07	7.06
VLT1-2,000	207	24.81	3.42
VLT1-3,000	207	19.04	4.79
VLT1-Academic	207	19.22	4.92
VLT1-5,000	207	15.72	4.65
VLT2-2,000	209	26.58	2.63
VLT2-3,000	209	22.16	3.59
VLT2-Academic	209	19.82	3.88
VLT2-5,000	209	15.11	4.17
VLT3-2,000	190	25.74	3.09
VLT3-3,000	190	20.04	4.27
VLT3-Academic	190	19.96	4.71
VLT3-5,000	190	17.56	4.40
VLT4-2,000	193	27.07	2.47
VLT4-3,000	193	23.04	3.87
VLT4-Academic	193	19.96	4.42
VLT4-5,000	193	16.09	4.34

Table 2. 相関係数 (Pearson Correlation Coefficient)

	VLDT-A total	VLDT-B total	VLDT-C total	VLDT-D total
VLT1-2,000	.45	.51	.46	.40
VLT1-3,000	.54	.55	.51	.49
VLT1 Academic	.50	.51	.48	.45
VLT1-5,000	.43	.47	.43	.43
VLT2-2,000	.41	.46	.42	.38
VLT2-3,000	.49	.57	.54	.53
VLT2 Academic	.45	.50	.46	.41
VLT2-5,000	.39	.47	.44	.43
VLT3-2,000	.37	.51	.48	.44
VLT3-3,000	.46	.51	.48	.48
VLT3 Academic	.43	.49	.46	.44
VLT3-5,000	.35	.47	.39	.36
VLT4-2,000	.42	.48	.47	.46
VLT4-3,000	.44	.56	.52	.50
VLT4 Academic	.40	.49	.47	.42
VLT4-5,000	.38	.46	.43	.47

大学生における語彙力と英語標準テストの関連性

次に、VLDTとVLTとの関連性を調べるために、VLDT-A(1回目)の得点に従って、被験者を高得点(H)群(21点以上)と低得点(L)群に分けた。VLDT-Aの高低群を独立因子として分散分析を行ったところ、VLT-2,000語、3,000語、Academic語において有意な交互作用が得られた。

図1に示されたように、VLT-2,000語レベルでは、第1回目と第2回目の得点の伸びにおいて、低得点群の成績の伸び(2.95点)の方が高得点群(1.83点)より大きく、交互作用が見られた($F = 3.96$)。

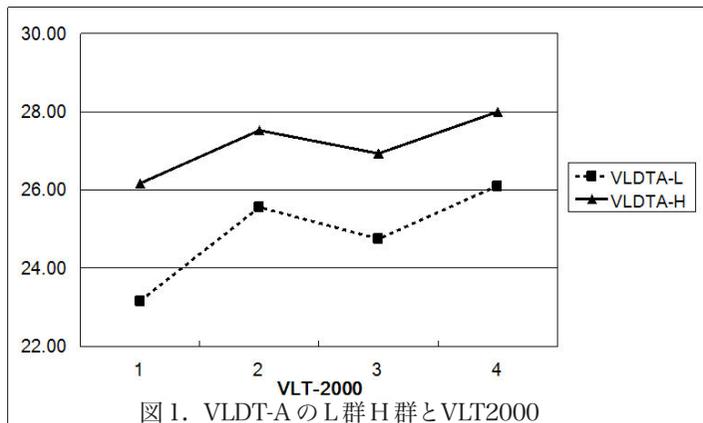


Table 3. VLT-2,000語レベルのANOVA

要因	<i>df</i>	<i>F</i>	<i>p</i>
1	177	41.81	0.00
2	531	64.49	0.00
12	531	3.96	0.01

Note: 第1要因：VLDT-Aの高群・低群
第2要因：VLT-2,000

図2に示されたように、VLT-3,000語レベルでは、VLDT-A低得点群における1回目(16.52点)と2回目(18.41点)への得点の伸び(3.89点)が大きいことが示され、交互作用は見られなかった($F = 2.62$)。また、3,000語レベルにおいては、低得点群の第1セメスターの伸びが最も大きいものの、高得点群も各セメスター共に伸びていることが示された(第1セメスターは2.64点、第2セメスターは2.90点)。第1回目と4回目では低得点群が4.74点、高得点群が3.64点、全体では4.20点と全ての語彙レベル中で3,000語レベルの得点が最も伸びている。

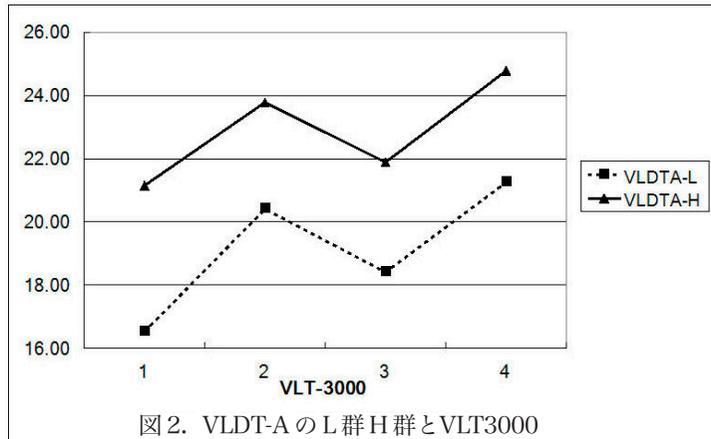


図2. VLDTA-AのL群H群とVLT3000

Table 4. VLT-3,000 語レベルのANOVA

要因	<i>df</i>	<i>F</i>	<i>p</i>
1	177	67.41	0.00
2	531	108.25	0.00
12	531	2.62	0.05

Note: 第1要因 : VLDTA-Aの高群・低群
第2要因 : VLT-3,000

図3に示されたように、Academic語の得点に関しては、低得点群の平均点が4月(16.67点)から7月(18.25点)にかけて1.58点上昇した($F = 6.25$)以外、7月以降の得点の伸びは少なかった。

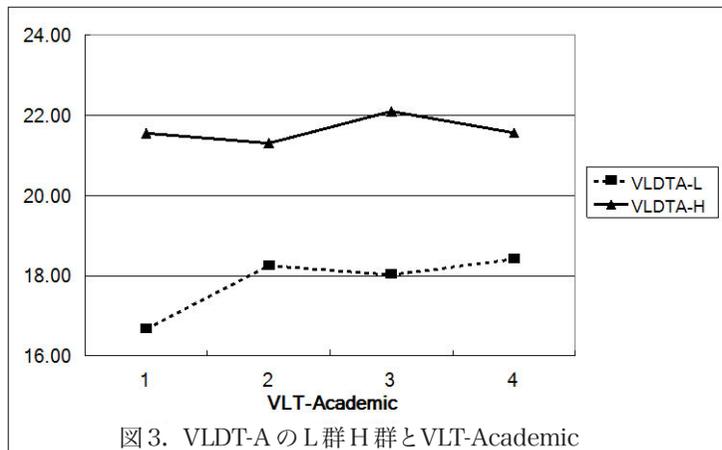


図3. VLDTA-AのL群H群とVLT-Academic

大学生における語彙力と英語標準テストの関連性

Table 5. VLT-Academic 語レベルの ANOVA

要因	<i>df</i>	<i>F</i>	<i>p</i>
1	177	52.26	1.4E-11
2	531	6.27	0.000342
12	531	6.25	0.000355

Note: 第1要因：VLDT-Aの高群・低群
第2要因：VLT-Academic

5.3. VLDT, VLT, CELTの関連性

VLT-2,000語（第1回目）の得点を高得点群（30点中25点以上）と低得点群（24点以下）に分けて調査を行った。高得点群はCELTとVLDTの平均得点において有意に高い結果を示した（Table 6）。

Table 6. VLT（1回目）高低群の比較

	VLT-2,000（1回目）			
	Low	High	<i>t</i>	<i>p</i>
CELT04	50.82	57.15	-3.87	0.00
CELT07	54.19	60.16	-3.65	0.01
CELT10	61.58	66.21	-2.73	0.01
CELT01	65.17	69.55	-2.68	0.01
VLDT-A total	18.20	22.95	-4.87	0.00
VLDT-B total	25.40	31.88	-5.52	0.00
VLDT-C total	22.22	26.60	-3.61	0.00
VLDT-D total	25.65	28.48	-2.84	0.01

またVLDT高得点群、低得点群とCELTの間には交互作用は示されなかったが、*t*検定を行った結果、群間には1%水準で有意差が示された。

Table 7. VLDT（1回目）高低群の比較

	VLDT- L	VLDT- H	<i>t</i>	<i>df</i>	<i>p</i>
CELT04	49.45	59.64	-6.64	202	0.00
CELT07	52.63	62.94	-6.79	193	0.00
CELT10	60.31	68.44	-5.03	182	0.00
CELT01	62.91	72.62	-6.51	185	0.00

6. 考察

結果から VLT-2,000 語レベルでは、VLDT-A における第 1 回目と第 2 回目の低得点群の成績の伸び (2.40 点) が高得点群 (1.35 点) より大きいことが示された。このことは、4 月の時点で VLT の最初の得点が低く、24 点をクリアしていない学習者にとっては、VLDT の課題が難しく点数に結びつかなかったことが考えられる。その後、第 1 セメスターの期間中における語彙習得への指導、および学内外におけるすべての英語学習活動による効果が、結果的に 2.40 点の得点の伸びとして表れていることが示唆される。また、2,000 語レベルの得点の伸びが一番低かったのは、第 3 回目と第 4 回目における高得点群 (1.07 点) であった (高得点群の第 1 回目と第 2 回目の伸びは 1.35 点)。この原因は、高得点群の VLT の得点が 4 月の時点で既に 26 点、7 月では 27 点を超過しており、満点の 30 点に近いために、それ以上の伸びが少なかったもの (ceiling effect) と考えられる。

次に、VLT-3,000 語レベルでは、VLDT-A 低得点群における 1 回目 (16.52 点) と 2 回目 (20.41 点) の得点の伸び (3.89 点) が大きいことが示された ($F=2.62$)。VLT-2,000 語レベルと同様に 3,000 語レベルの最初の得点が低かった学習者にとって、4 月の時点では VLDT の課題が難しく、点数に結びつかなかったことが要因の 1 つとして考えられる。一方で、2,000 語レベルと異なる点は、3,000 語レベルにおいては、低得点群の第 1 セメスターの伸びが最も大きいものの、高得点群も各セメスター共に伸びている点である (第 1 セメスターは 2.64 点、第 2 セメスターは 2.90 点)。第 1 回目と第 4 回目では低得点群が 4.74 点、高得点群が 3.64 点、全体では 4.20 点と全ての語彙レベル中で 3,000 語レベルの得点 が最も伸びている。この理由として考えられることのひとつには、被験者の 2,000 語レベルの平均得点が 4 月の時点で、24.81 点、7 月には 26.58 点と、2,000 語レベルの語彙を比較的早いうちからマスターしており、そのために 3,000 語レベルの語彙を大学内外の全ての英語活動をとおして、効率よく習得できる準備が整っていたことが示唆される。このことは、枝澤他 (2007) の先行研究を裏付ける結果ともいえる。

もう 1 つの要因として考えられうるのは、辞書調べ課題の影響である。辞書調べ課題に関する分析結果からは B2 群と B3 群のグループ間における有意差は示されず、また VLT、VLDT との分散分析においても有意な差は示されなかった。しかし、毎週 10 語、計 20 週にわたって継続的に英英辞書を引き、辞書調べ課題に取り組んだこと、また授業では語彙の意味だけではなく、発音や強勢の位置など音声面における指導をも丹念に行っていたことにより、学習者に語彙への関心と注意を向けさせ、語彙力増強を促進させる 1 つの要因となっている可能性は考えられうる。

つぎに、VLT で測定される語彙力と CELT で測定される語学力に関しては、三根他 (2006)

および枝澤他 (2007) の先行研究からも、その関連性が明らかであることが示されており、本研究において VLDT と VLT, CELT 間に関連があることが示されたことから、VLDT は被験者の受容語彙知識を測定すると同時に発表語彙知識を測るテストとして有効であることが示唆された。

7. 問題点と今後の課題

リスニングの授業で辞書調べ課題を与えた目的は、「リスニングスキル向上のためには、どのような語彙力の増強が望ましいのか」を調査することであり、2,000 語レベルおよび 3,000 語レベルの語彙力の強化が最も有効であるとする先行研究 (枝澤他, 2007; 今井他, 2009) に基づき、辞書調べ課題において、被験者を B2 群と B3 群に分け、群間における差異を調査した。VLDT と VLT との関連性を調べた結果、2,000 語レベルの下位群および 3,000 語レベルで得点の向上がみられたことから、20 回にわたる辞書調べ学習の効果は見られるものの、結果的には有意差は一切示されず、その関連性を明らかに示すことができなかった。今後は、調査方法および分析方法を検討することにより、リスニング力向上のために有効な語彙力について、さらなる研究を行っていきたい。

また、もうひとつの問題点は、VLDT が日本人英語学習者の英語力を測るために妥当な語彙を使用しているか、という点である。VLDT でターゲット語として使用されている語彙は、高頻度語順に 4 つのレベルに分けられており、第 1 パラグラフから第 4 パラグラフへと進むに従って語彙の難度が高くなる。今回実施された 4 回の VLDT のうち、第 2 パラグラフの得点平均は、20 点中 6.71 点、第 3 パラグラフでは 20 点中 4.6 点、また 4 回のテストの合計平均得点は、80 点中 25.40 点であった。これは、Fountain and Nation (2000) の先行研究で報告されている平均得点 49.02 ~ 51.47 点を大きく下回っている。従って、今後の課題としては、本調査における VLDT の結果が得点に結び付かなかった原因を分析し、その要因を特定するとともに、VLDT 自体の日本人受験者への適用の可能性と信頼性をも検証する必要性がある。

8. 参考文献

- Buck, G. (2001). *Assessing Listening*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fountain, R. L., and Nation, I. S. P. (2000). A vocabulary-based graded dictation test. *RELC Journal: Guidelines*, 1, 76-80.
- Imai, Y., Yoshimura, M., Fuse, K., Hiraiwa, Y., Mine, H., & Edasawa, Y. (2005). The relationship between Japanese EFL learners' listening ability and vocabulary. *Uniting the World: Selected*

- Proceedings (FLEAT 5 Proceedings)*. Brigham Young University, Provo, Utah. 46-54.
- Nation, I. S. P. (1990). *Teaching and Learning Vocabulary*. Heinle and Heinle: Boston.
- Oller, J. W. Jr. (1979). *Language Tests at School*. London: Longman.
- Schmitt, N. (2000). *Vocabulary in language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schmitt, N., Schmitt, D., and Clapham, C. (2001). Developing and exploring the behavior of two new versions of the vocabulary levels test. *Language Testing*, 18 (1), 55-88.
- Thorndike, E. L. and Lorge, I. (1994). *A teacher's word book of 30,000 words*. Teachers College, Columbia University: New York.
- 枝澤康代・今井由美子・古荘智子・布施邦子・三根浩 (2007). 大学生における語彙力と英語標準テストの関連性 同志社女子大学総合文化研究所紀要 第24巻, 55-66.
- 今井由美子・古荘智子・布施邦子・三根浩 (2009). 『大学生における語彙力と英語標準テストの関連性 (2) : 3,000語レベルとアカデミック語レベルの比較』同志社女子大学英語英文学会 *Asphodel* 第44号, 189-205.
- 三根浩・枝澤康代・吉村満知子・今井由美子・布施邦子・平岩葉子 (2006). リスニングにおける語彙サイズと学習方略 同志社女子大学総合文化研究所紀要 第23巻, 59-69.
- 浦田俊之. (1988). 「総合テストとしてのディクテーションの実用性に関する実験的研究」第27回大学英語教育学会 (JACET) 全国大会発表論文集, 85-86.

注1) この論文は、第49回 (2009年度) 外国語教育メディア学会 (LET) 全国大会 (神戸) において口頭発表したものに加筆修正を加えたものである。今回の調査にご協力をいただいた同志社女子大学の枝澤先生、今井由美子先生、平岩先生に厚く感謝する。

Appendix 1. VLDT サンプル

A sample test

Let us look first at a script of the test. The instructions and the dictation are recorded on tape. Each test takes around twelve minutes.

Test B

This is a dictation test. You will hear a passage read once. Write what you hear. Remember, the passage will only be read once. It will not be repeated. Are you ready to begin writing?

INTRODUCTORY PARAGRAPH

The demand for food/ becomes more important/ as the number of people in the world/ continues to increase./

RELC JOURNAL VOL. 31 NO. 2 DECEMBER 2000

大学生における語彙力と英語標準テストの関連性

Appendix 2. 辞書調べグループと各テスト間の MANOVA

辞書調べグループと TOEIC, VLDT の MANOVA

要因	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	<i>p</i>
1	1	169.4621	168	139.08	1.22	0.27
2	1	8492.021	168	139.08	61.06	0.00
3	3	2059.234	504	14.05	146.61	0.00
12	1	225.7508	168	139.08	1.62	0.20
13	3	9.379502	504	14.05	0.67	0.57
23	3	72.74578	504	14.05	5.18	0.00
123	3	12.54185	504	14.05	0.89	0.44

Note: 第1要因：辞書調べ課題B2群・B3群
 第2要因：TOEIC高群・低群
 第3要因：VLDT

辞書調べグループと TOEIC, VLT-2,000 語の MANOVA

要因	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>Df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	<i>p</i>
1	1	33.16381	174	21.62	1.53	0.22
2	1	845.357	174	21.62	39.10	0.00
3	3	184.4417	522	2.94	62.69	0.00
12	1	16.43307	174	21.62	0.76	0.38
13	3	2.807179	522	2.94	0.95	0.41
23	3	20.56869	522	2.94	6.99	0.00
123	3	1.929937	522	2.94	0.66	0.58

Note: 第1要因：辞書調べ課題B2群・B3群
 第2要因：TOEIC高群・低群
 第3要因：VLT-2,000

辞書調べグループと TOEIC, VLT-3,000 語 の MANOVA

要因	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>Df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	<i>p</i>
1	1	40.24862	174	39.71	1.01	0.32
2	1	2001.626	174	39.71	50.41	0.00
3	3	618.8409	522	5.98	103.56	0.00
12	1	30.01247	174	39.71	0.76	0.39
13	3	6.353457	522	5.98	1.06	0.36
23	3	4.151053	522	5.98	0.69	0.56
123	3	5.410934	522	5.98	0.91	0.44

Note: 第1要因：辞書調べ課題B2群・B3群
 第2要因：TOEIC高群・低群
 第3要因：VLT-3,000

辞書調べグループと TOEIC, VLT-Academic 語 の MANOVA

要因	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>Df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	<i>p</i>
1	1	86.95573	174	49.20	1.77	0.19
2	1	2336.984	174	49.20	47.50	0.00
3	3	34.91665	522	5.24	6.66	0.00
12	1	0.292556	174	49.20	0.01	0.94
13	3	8.790997	522	5.24	1.68	0.17
23	3	47.12763	522	5.24	8.99	0.00
123	3	8.314878	522	5.24	1.59	0.19

Note: 第1要因：辞書調べ課題B2群・B3群
 第2要因：TOEIC高群・低群
 第3要因：VLT-Academic

辞書調べグループと TOEIC, VLT-5,000 語の MANOVA

要因	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i>	<i>p</i>
1	1	0.008016	174	38.13	0.00	0.99
2	1	1798.623	174	38.13	47.18	0.00
3	3	220.8913	522	8.29	26.65	0.00
12	1	5.012777	174	38.13	0.13	0.72
13	3	0.907278	522	8.29	0.11	0.95
23	3	5.075405	522	8.29	0.61	0.61
123	3	3.130157	522	8.29	0.38	0.77

Note: 第1要因：辞書調べ課題B2群・B3群
 第2要因：TOEIC高群・低群
 第3要因：VLT-5,000